Weekend Nikkei

日本経済新聞　1993年（平成5年）5月22日（土曜日）

文化

日仏ビデオアート交流

アイデア競い共同制作

ISDN利用して美大や芸術家結ぶ

日本の美術学校の生徒とビデオアートを共同制作するため、フランスから十四人の美大生が来日している。こうした交流分野で学生間の国際交流が行われるのは初めてのこと。来年度から本格的にスタートする高速通信システムを利用した「映像芸術ネットワーク」作りに備えた人的交流の一環だ。参加する教授陣と学生は、ハイテクを駆使した日仏合作に意気込んでいる。

（編集記者）

作品は仏で放映

今回の日仏交流プロジェクトの発起人は、映像芸術に意欲的に取り組んでいるパリの国立高等装飾美術大学のドン・フォレスタ教授、ナント美術大学のクリスチャンヌ・タント・カールリュ教授と武蔵野美術大学講師の中島興氏。

三人の呼び掛けに内山聖太郎（東京芸術大学）、三田村畷右（筑波大学）、山本圭吾（武蔵野美術大学）、山口勝弘（神戸芸術工科大学）、飯村隼彦（名古屋造形芸術大学）の各教授と東京・杉並の阿佐ケ谷美術専門学校が応じた。

これらのメンバーは、七〇年代から映像のテクノロジーを使って作品を制作し、世界的に活躍してきたメディアアートの先駆者たち。フランスから来日したばかりの生徒や同行の三人の教授を招いた九日の歓迎パーティーで、山口教授は「ようやく日本でも学生たちが映像芸術分野で国際的な交流ができるようになったのは喜ばしい」と語った。

来日した国立高等装飾美術大学やナント美術大学、グルノーブル美術大学からの学生は二、三人ずつのグループに分かれて日本の各大学や美術学校に滞在する。日本人の生徒たちと三週間ペアを組んで、ビデオ作品を共同制作する。出来上がった作品は帰国後、フランスのテレビ局ARTEで放映する予定だ。来年は日本の生徒が渡仏するほか、フランスからも新しい学生を迎え、交流は毎年継続するという。

作品のアイデアは様々。日本の舞踏家の体に小型のビデオカメラをくくり付けて、「体が見る風景」を撮影するというもの、東京の風景や人間の顔を連続して編集し、人の顔を木や建物に変貌させるというものなど。日仏どちらの学生も、意見を交わしながらの共同制作に意欲的だ。

回線交流の土台に

中島氏は今回のプロジェクトの目的を、ISDN（総合デジタル通信網）を使って日仏の美術大学をつなぐ「ネットワークのきっかけ作り」と説明する。

画像などを高速で送受信できるISDNを使用、これをビデオ機器やコンピューターなどに接続して映像の交換をする。双方から送った映像や音を同時に合成してモニターに映したり、開いたりできる。今回の日仏交流プロジェクトでは、まずは現場での共同制作を学生に経験させ、将来のISDNを使った交流の土台を作ろうというわけだ。

フォレスタ教授によると、フランスではすでに六つの芸術大学がこの回線でのネットワークを持ち、国内はもちろんのこと、スイス、米国などと映像・音の交換をしている。日本でもISDNの普及が始まったが、産業分野での利用がほとんどだ。芸術分野では山本教授らの映像芸術家や研究者が個人レベルで交信しているものがほとんどで、美術大学が参加するというケースはまだない。

しかし日本でもいくつかの美術大学で、映像芸術分野の新しい設備などを次々に拡充する動きが出ている。昨年春、茨城県取手市に取手キャンパスを開設した東京芸術大学では、内山教授が中心となり、映像などを扱うデザイン科の一部も取手に移転した。研究室やスタジオには、最近になってビデオ、コンピューター、ハイビジョンモニターなどの最新機器が導入され始めた。内山氏はここを取手市と共に取り組んでいる「映像未来都市構想」の拠点にする計画だ。

武蔵野美術大学は、三年ほど前にメディアアート・ラボを設置している。同大学が映像学科を設けたことが、きっかけになった。郡井県を本拠に、ISDNや衛星を使って世界と映像の交流を続けている山本氏を招き、設備に約八億円をかけたという。ここに先月三十日、ISDN回線が導入された。阿佐ケ谷美術専門学校でも回線を整え、すでに海外との交信を試みている。同校では、来年度からISDNを交流プログラムに生かす予定だ。

「密室で一人で絵を描いたり研究する以外にも、世界中で自由に映像や音を交信しながらの新しいコラボレーション（共同制作）の形があってもいい」。言葉や物の考え方の違う相手のドキュメンタで、数カ国間をつないだ映像と音のコラボレーションに参加した経験を持つ。約四カ月間の予定で来月から始まるベネチア・ビエンナーレでも、米国、スイスなどと同様の試みを計画中。海外では、芸術分野の新たな道具としてISDN利用が広がっている。

各校の教授らの努力により美術学校が映像機器やISDNを整備し始めたことで、学校レベルでの学生交流もしやすくなったと言える。海外で使用されている映像機器の多くは日本製であることから、日本の映像芸術は注目を浴びてもいる。

筑波大学にはウィーンとヘルシンキの芸術大学が学生交流を打診してきた。実現すれば、今夏にも三十人あまりが来日することになる。今後、こうしたプログラムはますます増えることだろう。

「まず第一回を実現できたことが重要」と内山教授は今回の交流プロジェクトの意義を語る。だが、フランスの学生の受け入れ態勢については来年以降、検討すべき問題も多い。今年はフランスの美術学校、文化省と外務省や、パリにある日系の財団、アエロフロート航空が渡航・滞在費や制作費を助成している。

しかし日本側からの援助はほとんど受けられず、足りない分は、参加している教授陣が負担しているのが実情だという。交流事業をどのようにバックアップしていくかが、今後のネットワークの出来栄えを左右することになりそうだ。

コンピューターを使って映像交換の講演をするフォレスタ教授（13日、阿佐ケ谷美術専門学校で）